

思ひ草

第44号

令和6(2024)年7月5日 発行

人間開発学部の次の10年のために

國學院大学人間開発学部は創設16年目を迎えました。本学を卒業して教育現場に巣立った卒業生数は累計で1,000人以上に及んでおり、初期の卒業生は経歴10年以上の中堅教員として、学校現場の中核を担って活躍しています。

國學院大學は戦前より私学における教員養成のパイオニアであり、戦後も一貫して中等教育を担う教員を多く輩出し「教職の國學院」と呼ばれてきました。人間開発学部はこうした大学の歴史を継承して、教員養成を主たる柱とする学部として開設されたものであり、現状における教員養成の実績は「教職の國學院」の看板を名実ともに引き継いでいるものということができます。

このように本学部における教員養成はかなりの実績を積み上げてきていますが、次の10年、20年の将来を見据えて課題となるのは、本学を卒業して教育現場を担っている現職の院友教員をサポートする体制作りにあると考えます。これまで力を注いできた教員を送り出すことに加えて、

学部長 おおた なおゆき 太田 直之



送り出した後のアフターケアの充実を図ることを本格的に検討し、実施に移す時期が来ていると言えるでしょう。

既に本学部では教育実践総合センターが主体となって毎年夏季教育講座を開催し、大学の研究者と教育行政の担当者、現職の先生方等が共に実践的な教育課題について学ぶ場を設けており、例年多くの卒業生が参加してくれていますが、より多くの卒業生が継続的に参加してもらえる取り組みが求められます。さらに、学び直しという観点から言えば、大学院の設置こそが最も求められる施策であることは論を俟たず、この実現には複数のハードルが存在しますが、少しでも早く実現すべく不断の検討を進めていく必要があります。

次に卒業生が集い交流を深める場として、本学には同窓組織として院友会が存在しており、横浜市では院友の教員会が活動しております。今後は本学部が旗振り役となって、こうした組織の拡充と参加者増に努めていくことが求められます。

「共感」が学ぶ意欲を引き上げる

初等教育学科准教授 みた ひろき 三田 大樹



今、多くの学校で、校長先生が作成する学校経営方針には、「地域と共にある学校」の文字が掲げられています。そこにあるから学校ではなく、何をこの学校が担い、なぜ、この学校がここに必要なのかという視点で、学校の価値を捉え直す時代がきています。学生の皆さんが、教壇に立つ頃には、一層地域の学校の教員としての姿勢が求められることになるでしょう。そして、こうした考え方や振舞いは地域の方々の共感を生むはずで

さて、私は、昨年度まで、教育委員会の立場からコミュニティ・スクールを推進してきました。社会に開かれた教育課程を実現するためには、校長のリーダーシップはもちろん、教員一人一人のカリキュラム・マネジメント力が欠かせません。そして、その鍵は、地域の人材や資源・文化などを活用した体験的で探究的な学びとしての総合的な学習の時間(以下、総合学習)を「ちゃんとやる」ことにかかっていると私は考えています。一方、方針を示したとしても、

教員一人一人が、地域と共にある学校を踏まえた総合学習の意義に「共感」し、自分事として具体的にイメージできなければ、より良い教育活動は生まれないことも痛感しました。

これは、子供との関わりにおいても同じことが言えそうです。教員を目指す学生の皆さんには、授業づくりにおいて、「課題」や「めあて」が、子供たちにとって「共感」に値するものかどうかを常に意識することをおすすめします。共感や切実感は、子供の学ぼうとする意欲を各段に引き上げます。このように子供たちが主役となる授業を目指すとともに、身近な地域を活用した授業展開のバリエーションを増やしていただきたいと思います。きっと、これからの学校で期待される皆さんの自信や手応えにつながっていくはずで

保育実習

保育実習での出会いから学ぶ

子ども支援学科教授 しまだ ゆきこ
島田由紀子

子ども支援学科では、2年生の授業終了時に保育所実習、3年生の夏休みに施設実習、秋に保育所または施設での実習を行っている。学生は、実習を通じて何を学びたいのかを考え実習に臨む。また、授業等でこれまで学んできたことを実習施設等の事前のオリエンテーションから知ることのできた様子や実態に応じて、読み聞かせの絵本を選んだり、手遊びや身近なものを使った工作等を準備したりしている。自分の名札をフェルトで作し、自己紹介の方法を考え、初めて出会う子どもや利用者とのコミュニケーションを取るための方法についても考えている。

ある学生が児童養護施設の実習に行った際、子どもや職員とボードゲームを楽しんだことが強く印象に残っていると話していた。ボードゲームを介してコミュニケーションを取り、互いの考えや思いを伝え合う。立場が異なっても一緒に遊んだり、同じ経験をしたりすることによって、互いの気持ちが通じ合い、関係を築くことに気付いたようであった。

また、保育所で乳児のクラスに配属になった学生からは、はじめは乳児との関わりに戸惑いながらも、やさしく話しかけたりスキンシップしたりするなかで、気持ちが通じ合うことに驚きや喜びを感じたようであった。こうした経験は保育実習ならではの学びであり、保育職の魅力を実感することにつながっている。

保育実習は実習先が様々で、施設の利用者も乳児から成人まで年齢や背景が多様であり、コミュニケーションの方法についても配慮や工夫が必要である。学生にとって保育実習で出会う人々との関わりは、想像することが難しく不安に感じていることも少なくない。保育者や職員が子どもや利用者に関わる姿から多くを学び、そこから学生自身も実践を試みている。保育実習を通じて、相手の立場になって考えたり尊重したりする経験を重ねることが、社会人として保育者としての大きな一歩となっている。

実習を通して明確となった目指すべき保育者像

子ども支援学科 4年 ^{な お み}直海 ^{こ と こ}琴子

最後の実習となる今回の保育所実習では、これまでの実習であまり関わることのなかった乳児の発達と援助を詳しく知りたいと思い、2週間1歳児クラスの活動に参加させていただきました。どの子どもと関わることを経験しはじめた段階で、それを援助できるよう子ども一人一人に対して必要な援助を自分なりに意図を持って行うことを意識して、日々実習に臨みました。

保育について学んでいると「子どもに寄り添う」という表現をよく聞き、私自身も今まで使ってきました。この表現が具体的にどういったことなのか、保育者の援助や子どもとの関わりから考え、これまで実習に臨んできました。子どもの遊ぶ姿をよく観察するなかで、1歳児は保育者の表情、動き、声掛けをよく見て聞いていると感じました。自分の言葉でうまく伝えられないからこそ保育者の顔を見て訴えてくれる場合もあります。保育者は子どもの思いを受け止めるだけでなく、汲み取り、言葉にしてその子どもや相手の子どもに丁寧に伝えてあげることが求められます。伝え方も目の前の子どもの性格や発達に合わせて、どのような言葉や動きで伝えたら良いかを他の保育者と共有しておくことが大切であると学びました。

これまでの経験から「子どもに寄り添う」、この言葉が意味することは、「目の前の子どもを理解し気持ちに共感すること」だと考えます。言葉が通じる・通じないに関わらず、自分の気持ちを表現することが得意な子・不得意な子に関わらず、保育者は子どもの気持ちを知らうとすることが大切であると、今回乳児と接することでより深く学ぶことができました。保育所実習、幼稚園実習、施設実習と実習を繰り返すなかで、その場に求められる保育者の姿勢や実習生としての態度を学ぶことができ、すべての経験が今後の糧となる学びの多い経験となりました。今後様々な場面で経験を積み、自身の知見の幅を広げ、子どもがこの先生は自分の気持ちを理解してくれると感じられる保育者としての援助姿勢を持ち続けたいです。

教育インターンシップ

教育インターンシップでの貴重な経験

初等教育学科 3年 ^{みやざわ さき} 宮澤 咲妃

わたしにとって、小学校での教育インターンシップは改めて小学校の教師になりたいという夢を実感させるものであった。この教育インターンシップでわたしは、子どもたちの学習補助やプール補助、宿泊行事等の引率をおこなった。また、小学校1～6年生の子どもがそれぞれどのような個性やよさをもっているのか、子どもたちと授業や休み時間などのコミュニケーションを通して学んだ。

この活動で印象に残っていることは子どもを継続的に見守り、サポートすることの大切さである。特別な支援を必要とする子どものサポートをおこなっていた際に、自分が伝えなければいけないことを理解してもらえず、自分自身が戸惑い、教師の仕事の大変さを改めて感じたことがあった。その際に、児童専任の先生が「伝えるためにいろいろな試行錯誤が必要で、子どもをよく見ていなければならない。」ということをおっしゃっていた。わたしはこれを見て、子どもに対してどのような表情で、どのような言葉をつかって伝えるかを何回かのコミュニケーションを通して知ることができた。最終的に、このような子どもに対してどのようなことに気をつけて伝えるかを考え、学ぶことができた。このことから子どもを継続的に見取りながら支援をおこなう重要性を感じた。

教育インターンシップでは子どもだけではなく、たくさんの先生方と関わった。様々な経験されている先生方と一緒にそれぞれの子どもについて考えることで、学校現場でしか経験することができない子どもや教師とのコミュニケーションの取り方を学ぶことができた。これは教師になっても同じようなことが言えると思う。自分だけで子どもを見るのではなく、先生方と共に子どもたちを見ることで、子どもに対して新たな見方や考え方を得ることができる。この教育インターンシップで学んだことを生かし、教育実習に臨んでいきたいと考える。

教育インターンシップで学んだこと

健康体育学科 3年 ^{やまの るい} 山野 留依

私は、大学二年生の10月初旬から11月末の約2か月の期間、教育インターンシップとして、横浜市立谷本中学校に行きました。授業や部活動の関係で、週に1日同じ曜日でしか行くことができなかったのですが、その中でもとても多くのことを学ぶことができました。

最初のころは自分から生徒や先生に対してコミュニケーションを取りに行くことができませんでした。しかし、これでは学びに来ている意味がないと思ったので、参観させて頂いた体育の授業で、困っている生徒がいたら気づいたことを伝えるというところから実践してみました。すると、そこから生徒と徐々にコミュニケーションを取ることができるようになっていきました。自分のできるところから始めてみるということの大切さ、そして思い切って行動してみることの大切さについて学ぶことができました。

そして、私が教育インターンシップを通して、一番学ぶことができたのは、教師の生徒に対する働きかけについてです。もちろん、授業の進め方や生徒に説明するときに気を付けることなどを学ぶこともできました。しかし、それ以上に先生方が生徒に対するかかわり方を見て、学ぶことができたことがインターンシップに行った一番の収穫だと思っています。指導法などは大学の授業でも学ぶことができますが生徒との関わりについては現場で見ないとわからないことがたくさんあるとわかりました。例えば、生徒同士でちょっとしたもめごとが起きてしまったときに、先生はあまり介入せず、生徒同士でなるべく話し合わせて解決に持っていくことが生徒のためにもなるということを知りました。もし生徒だけで解決できないときには、先生が助け舟を出して、最終的に生徒が解決するという方向にもっていくことが大切であると学びました。

このように教育現場に行かないと学ぶことができないこともあるため、教育実習に不安を抱えている人や、教師になりたいと強く思っている人、教育現場を少し見てみたい人は教育インターンシップに行くことをお勧めします。

教育インターンシップ連絡協議会・報告会

経験からの学びを生かす

令和6年1月23日(火)、令和5年度教育インターンシップ連絡協議会・報告会を対面で開催いたしました。全体会では太田直之学部長から、教育実習前の経験としての教育インターンシップの意義と学生への指導に対して、受入れ校・園へお礼の言葉がありました。

その後、令和5年度教育インターンシップの実施状況の報告に引き続き、学生の実習報告と学校や幼児教育施設の先生方からの実施状況報告がありました。幼稚園実習について子ども支援学科2年の小林夏子さん、小学校実習について初等教育学科2年の小田切晴紀さん、中学校実習について健康体育学科2年の小川拓也さんが教育インターンシップの経験や学びをもとに報告しました。また各園や学校の実施状況について、横浜市立さつきが丘小学校児童指導専任の古市真理先生、横浜市立山内中学校副校長の草野健太先生、新日本保育園実習担当の東みさ子先生から実習中の学生の様子や学生に今後期待することなどのお話をいただきました。

そして第2部では、受入れ校・園の多くの先生方にご参加いただき、校種別に分かれた分科会を行い、「教育インターンシップの経験を教育実習にどう生かすか」のテーマのもと、先生方からのアドバイスを参考に活発な意見交換を通して課題や目標を明確にし、学びを深めることができました。

第15回夏季教育講座
教育実践フォーラムのお知らせ

テーマ

『令和の日本型教育を考える』

～Society5.0時代における

子どもの学びと学校づくり～

日時 令和6年8月1日(木)

13:00～17:00

会場 國學院大學たまプラーザキャンパス

内容

◆全体会 基調講演

◆分科会 ①幼児教育

②国語

③理科

④体育・保健体育

⑤道徳

申込み 教育実践総合センター

國學院大學 教育実践総合センターホームページ・
チラシの申し込みフォームより申し込んでください。
(7月25日まで)

教育インターンシップ連絡協議会

日時

第1回 令和6年7月9日(火)

第2回 令和7年1月23日(木)

会場

第1回はオンライン

第2回は対面で開催

國學院大學たまプラーザキャンパス

内容

教育インターンシップをよりよい活動や
学びにするために受け入れてくださっている学
校・園・施設の方々と活動の様子について情報交
換・意見交換を図ります。

今年度のスタッフ

◆教育実践総合センター

センター長 近藤良彦

副センター長 高橋幸子

担 当 小笠原優子 井田 均 岩城眞佐子